

比較思想文献紹介

小坂国継『西田幾多郎をめぐる哲学者群像』
近代日本哲学と宗教』ミネルヴァ書房、
一九九七年六月

本書は西田幾多郎の哲学とそれと格闘しつつ自らの思想を練り上げていった近代日本の哲学者たちをあつかったものである。

第一部「宗教的自覚の論理——西田哲学の性格と課題」では、西田哲学の根本的性格とは宗教的な自覚の論理化であるとされている。そしてその本質をより鮮明にするため、同じく宗教的自覚の立場にたつスピノザ哲学との比較が試みられている。第二部「絶対無と弁証法——西田哲学とその周辺」では、田辺元・高橋里美・三木清・和辻哲郎・久松真一らが取り上げられ、いずれも西田哲学の絶対無の概念を批判的にまた発展的に継承していることが示されている。以下で各章の内容を紹介する。

第一部第一章において著者は西田哲学の基本的性格として三元論の徹底的否定をあげる。すなわち主客「融和」の論理ともい

うべきその性格は、『善の研究』の現象即實在論から後の絶対無の場所の概念まで一貫していたのである。第二章では西田の「場所」の論理における実践概念としての「行為的直観」を検討している。すなわち、通常対蹠的であると考えられている行為と直観は実際は相即的・相補的なものであり、物や世界についての深い主體的洞察からおのずと生じてくる行為的直観は宗教的自覚ともいふべきものである。

第三章から第五章までは西田哲学とスピノザとが比較されている。個体と普遍の關係に注目すると、スピノザの「神に対する知的愛」は、人間の神に対する愛であると同時に神の自己自身に対する愛であり、したがってまた神の人間に対する愛でもある。同様に、西田における「絶対無の自覚」もまた、宗教的意識としての自己の絶対無の自覚であると同時に、絶対無の場所自身の自覚でもある。一方、時間と永遠の問題についていえば、スピノザの時間は個物を永遠の相の下に解消する時間であるのに対して、西田の時間は個物が自己を永遠の今の自己限定として自覚する時間である。永遠

の静寂があるにすぎないスピノザ哲学とは異なって、西田哲学では「自己の内なる神」の精神への顕現という主體的自覚の側面が強調されている。さらに宗教と道德の關係については、スピノザは善悪の觀念を自然的・道德的・宗教的の三段階で捉えながら、絶対的宗教的善悪がどうして相対的道德的善悪と關係をもちうるのかについては明らかにしてはいない。西田もまた、宗教は道德的自己在自己矛盾の極点において自己自身を絶対否定することによって開示されるとするものの、現実の宗教が道德をどのように基礎づけるのかについては論じていない。両者ともに宗教的自覚の觀念が道德といかに結びつくのか判然としない点で、同じアボリアを抱えているのである。

第六章では、第一部のまとめとして、西田哲学の最大の課題とは、現象的日常的な世界と深層の實在的宗教的自覚の世界との結びつきを明らかにすることである、としている。

第二部第二章では、現代日本を代表する西田哲学・田辺哲学・高橋哲学に共通する宗教哲学的要素と弁証法的要素をあげ、さるがある。それはおそらく宗教の定義がはっきりとしていないからであろう。著者は第一部第二章「宗教的自覚の論理」において、意識的レヴェルでも道德的レヴェルでもない自覚を無前提に「宗教的」自覚と呼んでいる（二七頁）。しかしそれは通常の西洋哲学のターミノロジーにおいて「存在論的」とか「形而上的」とか呼ばれるものではないだろうか。宗教というならば神なりダルマなりの觀念や教義などが前提とされているはずなのに、第一部において西田哲学と浄土宗や禅仏教またキリスト教との關係は明らかではない。西田自身が定義していないといえはそれまでなのだが、西田哲学の根底には宗教があるというのなら、それがどのようなものであるのか知りたく思う。

(平山 洋)

らにそれらの根底にあるものが日本独自の絶対無の概念であるとしている。第二章では、そのうち田辺の哲学が西田の「絶対無の場所」の思想を乗り越えようとする試みであって、やがてそこから種の論理を中心とした自らの絶対媒介の弁証法を打ち立てたことを明らかにする。

続く二つの章では高橋里美の哲学が扱われている。すなわち第三章において高橋の『善の研究』批判を取り上げて、そこに後の高橋哲学の萌芽を見いだしている。さらに第四章では、高橋哲学の、あらゆる存在を包摂しそれらを自己の内へと包摂する全体としての包摂的・存在は、西田の絶対無の場所の概念に近いことが示される。ただし高橋の哲学はすべてのものを永遠なる自己完結的な静止の内に包摂しようとする強い傾向性をもっていて、西田よりいっそう静寂主義的である。

第五章では三木清が考察の対象となっている。ここでは晩年の三木の親鸞論が歴史の相対性における絶対性の自覚として西田哲学の超克の意味をもっていたこと、また、『哲学入門』は、西田哲学にあつて不十分

な「永遠の今における絶対性と歴史的相対性はいかにして綜合されるか」という課題に主体を重視する立場から答えようとしたものであったことが示されている。第六章は和辻倫理学との関連についてである。著者はここで西田の絶対無と和辻の空の概念の異同を検討しているが、西田と違って和辻では空がノエマ的に捉えられているために究極的には個人（個）の国家（全体）への一方的な婦人に陥ってしまうと批判している。第七章では西田の正統的後継者として久松が肯定的に評価されている。すなわち久松の「絶対無」は純粹に絶対自者的な「無相の自己」であつて、それは西田哲学を主體的な方向に徹底させたものである。最後に全体の感想を短く述べたい。

まず第二部については、西田とそれぞれ思想家との交流や思想への影響など、教えられることが多かった。とりわけ三木の親鸞論が西田哲学の超克を企図しているとか、和辻の空の弁証法は結局のところ時局への迎合に墮してしまふなど、目から鱗が落ちる思いがした。ところが第一部の「宗教的自覚」についてはじっくりいかぬとこ